

【参考資料1】

コンピテンシーとは

「特定の職種において高業績をあげる者に共通の特性」から転じて「成果を生む行動特性」のことをいいます。あるいは「ある職務や状況において、期待される業績を安定的・継続的に達成している人材に一貫して見られる行動・態度・思考・判断・選択などにおける傾向や特性(Wikipedia)」とも表現されます。

1970年代、米国の心理学者マクレランド教授が、同等の学歴や知能レベルの外交官に業績の差が出るのはなぜかを研究し、適性者の持つ「知識・技能・態度＝コンピテンシー」をリストアップしました。その成果が1990年代に米国において人材活用の場にとりいれられ、コンピテンシーということばが広がりました。

現在は、日本でも特に企業や医療分野などで、成果を生む行動特性を分析してスタッフの教育や研修に用い、スタッフ全体の質の向上を図る試みが広がっています。また、OECDが現代社会に生きる人に求められる「キー・コンピテンシー」を研究発表したことは記憶に新しいでしょう。

一方で、コンピテンス=能力と混同されたり、一方的な人事評価のツールとして使われたりすることが少なくないために、しばしば成果主義、能力主義の悪弊を促進するものであると誤解されています。企業などでも、コンピテンシーリストで評価の低い人間を排除しよう、人事考課に使用おう、などという使われ方をすることがありますが、そのような使い方は、現場の士気を下げ、競争主義をあおるだけです。

教育のように温かいコミュニティの中で営まれることが望まれる場においては、さまざまな特性を持った先生たち、大人たちがそれぞれの特徴を認識し、関係性の中でそれらの多様性を活かしながら協働していくことが必要でしょう。そういう支え合いの大人コミュニティを見ている子どもたちは、自分たちもまたそういう社会を作っていくことでしょ。

教員が、自分が職務を遂行していくために必要な力は何かという改善目標の目安、最低限してはならないことは何かという認識、長年無意識でしていた行動を意識的に変えるきっかけ、自分の振り返りのためのツール、としてコンピテンシーを理解して、教育の場全体の向上を図るために、仲間とともに話し合いながら、不足している力をどう補いあい成長していけるか、成長の場を創っていくために必要な条件は何かを考える、そんなふうコンピテンシーを活用していくことができればよいのではないのでしょうか。

そのために、まず、自分たちで自分たちに必要なコンピテンシーは何だろうかと主体的に考える機会、自分たちで自分たちに必要なことを考えてありかたを変えていける自律的な環境が必要なのだと思います。

(武田信子)

参考文献：「育つ・つながる子育て支援 具体的な技術・態度を身につける32のリスト」

子育て支援者コンピテンシー研究会／編著 チャイルド本社、2009

【参考資料3】

日本の子どもたちの心理教育的環境について —オランダとの比較から

本稿は 2006 年 12 月にオランダアムステルダム自由大学大学院心理教育学研究科において、当時、同大学客員研究員だった武田信子が、教育学部教員および大学院生対象に行った講演の日本語原稿である。(当日はパワーポイントを提示し英語で講演した。使用した写真や図表など当日の資料についての詳細は、著者まで)

はじめに ～グローバルゼーションの中で、日本の教育が世界に及ぼす影響は？

私たちの命を受け継ぐ次世代の教育をどのようなものにするか、ということはいかなる国においても、大変大きな課題です。グローバルゼーションの流れの中で、実際のところ、自分の国の教育だけでなく、世界の子どもたちの教育がよくなっていかなくては、この地上の社会のどこかのひずみが、自分の国に降りかかってくる、ということが起きることはもう既に明白でしょう。逆に、どこかの国の教育がすばらしいものであれば、それを他の国がとり入れることによって、国の発展と世界の平和を実現していくことができるかもしれません。

アメリカの教育の結果は、つまるところ、イラク戦争につながっているでしょうし、北朝鮮の体制維持には、教育が利用されています。トルコやモロッコの教育が、オランダの教育に影響を与えることは皆さん実感しておられると思いますし、オランダの教育はトルコやモロッコの教育に影響を与えているでしょう。また、私が今ここにこうしていられるのは、確かにオランダの英語教育の成果です。

では、日本の教育の場合はどうでしょうか？日本の人口はオランダ人の人口の約 10 倍です。GDP 世界第二位の日本の経済や文化が、オランダに及ぼす影響力は、多くはないかもしれませんが、少なくはないと思います。では、教育の影響はどう現れているのでしょうか。そして、これからどうなっていくのでしょうか？すでに、皆さんは日本の教育については、メディアを通していろいろなイメージを持っておられると思いますが、それは事実でしょうか？それは対岸の火事でしょうか？

メディアで伝えられる情報は、極端なエピソードであることが多いと思いますが、日本の教育の一面を確かに言い当てていると思います。本日の話も大変短いので、極端な部分を強調して話すことになります。オランダの教育と比較して、特にネガティブな面をとりあげるということを、斟酌してご了解いただければと思います。

まずはこの写真(省略)をご覧ください。日本のプリンセスとオランダのプリンセスが並んでいます。今年の 8 月に日本のプリンセスがオランダに来たときの新聞から取った写真です。日本の子どもはお行儀がよく、やや緊張しています。オランダの子どもは無邪気で、自由です。この

写真は日本とオランダの子どもの状態を象徴しているように私には思われます。このような違いはどうして生じるのでしょうか？

また、たとえば、卑近な例になりますが、この本（Gie Deboutte *Geweld Genoeg! Stichting Vredeseducatie Jeugd & Vrede*.1997）を見て下さい。日本の漫画がオランダに入ってきて、オランダの子どもたちに暴力的なシーンや差別的なシーンを与えていることに注意するようにと、この本では主張しています。日本の子どもたちが接しているものが、オランダの子どもたちにいつの間にか入り込んで影響を与えるとしたら、これを無視するわけにはいかないでしょう。一体、ポケモン、Wii、プレステ3が日本で誕生し、世界中で流行した背景は、どういうものなのでしょうか？その社会背景は、今後ますますオランダで広がるものなのでしょうか？

さらに、オランダと日本の関係を促進するという面言えば、現在、オランダに 7000 人、アムステルフェーンに 2000 人の日本人が住んでいますが、皆さんは日本人と交流したことがありますか？

ご存知かもしれませんが、オランダに来ている日本の子どもたちは、なかなか現地校に入りません。日本に帰国したときに、学校に溶け込むためには、日本で使われている文部科学省指定の教科書を使い、同じ年齢の子どもたちと、同じ知識を得ていなくてはならないからです。日本に戻ったときに、皆と同じでない、ということは、いじめられる原因にもなりかねませんから、オランダの自由な文化に染まった子どもができてしまうのは困るわけです。ですから、国際結婚の家族でなければ、通常は子どもを日本人学校に入れます。ただ、英語ができることは、日本では受験に役立ち、就職でも評価されますので、高額のお金を払って、インターナショナルスクールに入れる親もいます。10 月には、アムステルフェーンで、日本の塾による受験対策講習が二つも母親を対象に行われました。オランダにいながら、日本の受験で成功するにはどうしたらいいか、という対策をするためです。受験の年になると、子どもだけ、あるいは母親と子どもで帰国する家族も少なくありません。このように、受験重視の日本の教育の在り方が、オランダと日本の貴重な交流の可能性を封じているのです。

経済発展と日本の教育

戦後、日本の教育の成果はめざましいものでした。日本の子どもたちの学力は高く、真面目で従順な国民性は、日本経済の発展を生み出しました。日本の国際的な競争力は上がり、生活は向上し、第二次世界大戦で壊滅した東京は、世界有数の都市です。いまや日本で手に入らないものは、おそらく何もないのではないのでしょうか。

日本は、西洋の人々にとって、エキゾチックな興味と関心をひいて、若者にクールと言われたり、不可思議といわれる微笑と、交渉がうまくないのに進んでいく経済から、エコノミックアニマルと呼ばれ、揶揄の対象となったりしてきました。日本の教育が、規律正しい子どもたちを育てるという評判から、たとえば、制服をとりいれたり、子どもたちに掃除をさせたりする学校もいくつかの国で現れています。あるいは、自閉症の子どもたちをコントロールする教育方法が紹介され、取り入れられたりしています。数学のできる子どもが多いことや、識字率が高いこと、手先が器用なことも、伝わっているかもしれません。スウドクは既にオランダ語になっていると

思います。日本の公教育が、日本人全体の学力レベルを保ち、企業で働く労働者の質を保ち、勤勉な国民を育ててきたことは事実と思われまます。

この図（省略）を見てください。日本の学校のヒエラルキーです。東京大学という大学が一番上で、その中の医学部が一番上になっています。この大学を卒業すれば、人付き合いが出来なくても、おしゃべりが下手でも、運動ができなくても、よい会社に就職したり、資格試験に受かったりする確率が高いのです。最近では少し変わってきましたが、かつては、入学すれば、よほどのことがない限り、遊んでいても卒業できました。25年前、東大の経済学部学生は、猫より勉強しないと皮肉られていましたが、それでも、官僚になり、よい会社に就職していきました。よい会社、というのは、自分のやりたいことができる会社、というよりは、上場企業、有名な会社、給料が高い会社のことです。男性の場合は、結婚もしやすくなります。最近では違いますが、長い間、一度入った会社は、終身雇用制で、年齢が上がれば、給料が上がるようになっていました。したがって、このヒエラルキーの上の方の大学に入ることが、高校生の勉強の目標になります。つまり、ここに入学するために、大変厳しい入学試験に受からなくてはならないということです。一回の試験で高得点を取るためには、自分独自の考えを持つことよりも、試験に出る知識をより多く持つこと、出題をする先生が次に何を言うかを予測して、より早く、より要領よく応える技術、が必要になります。

そのために、高校の評価は、この大学に何人卒業生を入れたか、ということになります。中でのどのような内容の教育をどのような方法でしているかということではなく、大学の合格率、という数字が出て、その数字が高い高校を中学生は目指します。中学生はいい高校を目指し、小学生はいい中学を目指し、幼稚園では、いい小学校を目指します。小学生の4割が、放課後に学習塾に通い、小学校6年生の就寝時間は半数が11時以降です。2歳から小学校受験のための塾があり、模擬テストや問題集があります。その前に実は、脳を育てるということで、0歳からの塾すらあります。それらは、なんと、モンテッソーリやダルトンの教材や方略を用い、売り物にしたりしています。

変化する社会と教育のいきづまり

さて、このような教育システムが戦後日本で発展してきたわけですが、しかしながら、1970年を過ぎて、日本の教育は次第に機能しなくなってきました。経済的な安定が平均的にもたらされ、まじめに頑張れば生活が向上する、という神話が崩れ始めました。テレビが日常生活の中に入り、学校の先生の話は子どもたちにとって刺激的ではなく、つまらなくなりました。

勉強してよい大学に入り、よい会社に入ることが幸せであると言われてきましたが、子どもたちは、社員の父親が、毎日深夜、あるいは午前になってから帰宅し、過労で土日はごろごろ寝ているばかりの魅力のない人生を送っていることを毎日見ていました。一方、母親は、高校・大学を出て能力がありながらも、結局家庭に入り、家事育児にイラつき、子どもには、父親のようにはなるな、もっと出世しなさいと言いながら子どもを育てました。

そういう家庭で育ち、学校で道徳教育を受けながら、子どもたちは、テレビニュースで、目指

しなさいと言われていた地位の高い人たちが、実はずるいことをしている、ということも見聞きします。子どもたちは、日本の大人たちを見ながら、自分もこのような人生でいいのだろうかという疑問を持ち始めます。

そうして私が中学生になった 1975 年頃から、子どもたちが学校でいわゆる「問題」を起こすようになって来ました。学校に行けなくなってしまう心因性の不登校という現象が出現しました。現在は転校が可能になっていますが、当時は、日本では、長い間、問題が生じてても簡単に学校を転校することができませんでした。不登校の子どもたちは学校に行けないまま何年間も家に閉じこもるようになりました。

また、大学生の無気力が問題になりました。大学に入ったけれど、それまでの受験勉強で力を使い果たし、もう何を勉強していいかわからない、どうして生きているのかわからない、というのです。一方、多くの元氣な大学生は、大学では勉強せずに、アルバイトで稼ぎ、マージャンやディスコ、カラオケで遊び呆け、あるいは、クラブ活動やスポーツに熱中し、そこで社会的情緒的なトレーニングをして、最終的には大学の名前だけで、企業に就職していきました。

このあと、校内暴力、いじめなど、対人関係上の問題が、さらに学校で噴出するようになりました。ストレスによる胃潰瘍の最初の事例となった小学生は私と同年齢ですし、食行動異常の子どもたちも現れました。ストレスによる精神的な課題を負って、精神科に小学生が現れるようになりました。親や先生の言うことを聞いて勉強をし続けた優等生が思春期になって、社会情緒的な対人関係で挫折して、精神科に通う事例が多数報告され始めました。学級でのいじめによって子どもが自殺し、大きな話題になりました。一方で、勉強してせっかく入った有名企業でエリート社員が行き詰っている、そういう報道もなされるようになりました。

そんな中で、一所懸命勉強したり、仕事をしたりするより、うまく世渡りをしてお金を稼いだ方が、よい生活が送れると考える人たちが出てきました。ちょうどバブルの時代です。自分さえよければいい、という風潮が子どもたちにも広がりました。子どもたちの間で、「むかつく」「関係ない」「切れる」という3つの言葉がはやりました。「むかつく」とは、つまり、自分の思うとおりにならないことは腹が立つから見えないところに排除したい、という意味で、「関係ない」とは、自分の利害に直接関わらなければ、他人が困っていようと、社会問題があろうと、無視する、ということ。「キレル」とは、おとなしく従順であった人間が突然豹変して怒り出す、という態度を表す言葉です。このように、次第に、他人の痛みや悲しみに共感することのできない子どもたちが増えてきました。

成果中心の社会の破綻と子どもたちの抵抗の本格化

それでも日本は経済発展を目指しました。そして、1990 年を過ぎ、バブルが崩壊しました。

真面目なサラリーマンは、苦しい生活の中、以前にも増して働きましたが、子どもの顔も見ずに、深夜まで働き続けた父親たちが、失業したり、過労死したりするようになりました。今もなお、父親の平均帰宅時間は9時で、6歳以下の子どもと接する時間の平均は48分です。母親たちは、孤立した子育てにいらつき、二人目の子どもを産むことを躊躇し、家に帰ってこない父親と

は、心理的距離が広がりました。退職金を受け取った時点で離婚する、という例も出てきました。子どもたちにとって、家庭もまた安全な場所ではなくなってきました。そして、子どもたちの命をかけた反乱が始まりました。

心身の不調を訴えて、学校に行かなくなる子どもの数が増え、不登校生徒は中学生の3%、つまり30人に一人となりました。押さえつけられた子どもたちは、より弱い子どもたちを陰湿にいじめようになりました。いじめがエスカレートして殺人に発展することもあります。いじめられた子どもが、精神疾患になったり、自殺したりするようになりました。いじめを見ている子どもたちも、萎縮していきました。友達とも、お互いに本音で話すことができない環境になっています。学級崩壊とよびますが、学校の授業が成立しないようになりました。私の知人の中学校の先生は、日本で一番、青少年の犯罪率が高いのは、繁華街ではなくて学校の中だわ、とつぶやきます。スクールカウンセラーが各学校に配置されるようになりましたが、とても対応できる状況ではない学校が続出しています。学校は子どもたちにとって、面白くないばかりでなく、もはや危険な場所なのです。そして、子どもたちは、対人関係を直接持たずに済むゲームとコンピューターの世界にはまっていきました。

さて、ここまで、子どもたちの話をしてきましたが、学校の先生もまた受難者です。15年前に私は、日本で初めての学校教員対象のグループダイケアを精神科で担当していました。ベテランの先生たちが、教室の子どもたちの反抗に対応できなくなり、あるいは親と問題を起こして、精神科にくるようになったのです。私の友人の教師は、子どもたちとしっかり向かい合う大変気概のある教師でしたが、妊娠したときに、危険を避けるために授業以外は職員室を出ないと言っていました。この中学校では、問題のある生徒を一部屋にまとめて自由に行動させ、他の生徒に危害が加わらないようにしているとのことでした。

そして、10年程前には「なぜ人を殺してはいけないのですか」とテレビ番組で大人に聞いた高校生が話題になりました。青年が集団でホームレスを殺したり、サラリーマンを襲ったりする事件が続きました。援助交際といって、女子中学生が携帯電話で連絡をとりながら、大人を相手にデートをして、小遣い稼ぎをするようになりました。さらには、小学生が学校やその近辺で友達を殺す事件が起きるようになりました。

あるいは、自分自身の感情をうまく表現できない子どもたちが増えてきました。生きていくという身体感覚を得るために、自傷行為を繰り返したり、身体改造を試みたりする青年も生まれてきました。血が見たい、という子どもたちが出てきました。同時に、一所懸命勉強も出来ない、うまく世渡りもできない、自信もなければ希望もない、そういう子どもたちも大量に生産されました。社会的・情緒的な発達の問題がさらに大きくなってきたのです。

そして、この秋、連続して、いじめによる自殺が続いており、自殺予告の手紙が文部科学省に2020通以上届き、大臣が命を大切にしよう、いじめをやめるよう、文章を出しました。

子どもたちの変化と教育の苦悩

これらの背景には、家族が少なくなり、赤ちゃんの頃から一日に数時間、つまり世界で一番長

い時間、メディアに接し続けて、人とコミュニケーションをとる体験が極端に少なくなった子どもたちの脳神経の問題や、社会性の問題が関係しているといわれていますし、時間に追われ、狭い家に住む両親がイライラした状態で子どもに接しているということも一つの原因だと思われます。学校教育以前の人間としての育ちの問題が、乳幼児期に生じてきているのです。今日はお話していませんが、それは、私がここ数年以上取り組んできた課題で、オランダにいても、インターネットを使って、日本の仲間とその問題には取り組んでいます。

このような中で、学校においては、社会性を身につけずに育ってきた子どもたちへの対応に学校の先生たちは苦勞しています。ICTによる情報化社会の到来、グローバル化など、社会の変化にも関わらず、日本の多くの学校では、従前の画一的な授業を変えることができません。テレビのリモコン一つで、いくらでも面白い情報に接することのできる子どもたちは、前に立った先生の話の黙って45分間聞いていることにはや耐えられません。薄っぺらな教科書を、全員で読むような授業には飽き飽きしています。

先生は、舞台上でコメディアンが客をひきつけるようなステージを、毎授業展開しなくては子どもたちを満足させることができません。それができるほどの優秀な先生も日本には少なくないのですが、そのネタも方法も、個人で開発するしかありません。結局、勉強への動機づけも低く、コミュニケーション能力も低く、ばらばらになった生徒たちを一つにまとめることができずに、ベテランの先生たちでさえ、ストレスを抱えて、病気になったり、子どもをいじめたりするようになってきました。最新の統計(財団法人労働科学研究所「教職員の健康調査」2006.10)では、男性教員が抑うつ感を感じている割合は12%で、他の職種の1.8倍です。仕事量が多いと感じている女性教員の割合は、4.6倍です。その結果、転職する先生も増えてきました。そんな中で、来年の4月からは、発達障害の子どもたちをインクルージョンの名の下に普通学級に所属させる制度が、先生方に十分なトレーニングを受けさせないまま、始まります。

精神論に走る国の教育改革

このような状況になって、国としては教育をどのような方向に持っていかようとしているのでしょうか？子どもたちをさらに上から押さえつけようとする動きが強まっています。一部の政治家たちは、子どもたちが学校で反乱を起こしているのは、子どもたちの我慢が足りないからだ、子どもたちのしつけが足りないからだ、と考えており、もっと厳しくしつけ、もっと勉強させなくてはならない、と考えています。そのために、もっと国が教育をコントロールしなくてはならない、と考えています。ゆとりを持った教育へという流れが、ここ10年ほど唱えられましたが、PISAの結果が少し落ちたということで、それは失敗であったと結論付けられ、暗記と反復による教育が再び注目を集めています。個人の尊厳や人権尊重などというわがままが広がってきたから、このような状態になったのだと公言する政治家すらいます。今の日本の教育改革は、精神論ばかりが強調され、かつてのような学力の高さを再び目指そうという学力向上の目標だけがかけられ、なぜ子どもたちがこれほど苦しんでいるのか、ということに焦点が当てられていません。

また、教員の質が悪いのだ、と考える人も少なくありません。実際はそのようなことはないにもかかわらずです。教員養成課程に来る学生たちは、自分が学校教育で受けた感動を生徒たちに与えたい、あるいは、自分が受けた苦しみを変えて行きたい、という気持ちで、真摯に学ぼうとしていますし、現役の先生たちは、自分の生活を犠牲にしてまで、子どもたちのために働いています。でも、それらの献身の努力が、事なかれ主義の管理職や、硬すぎるシステム、学校を機能させない法によって、泡となって消えていきます。これでは、先生たちは気力をなくしていき、管理職になる頃には、自分も事なかれ主義になっていってもおかしくありません。

現場の限界と格差の拡大

先ほど申し上げましたように、もちろん、オランダにいろいろな学校があるように、日本にもよい学校は少なくありません。よい先生もたくさんいます。私はこれまでに日本全国の100以上の学校を訪問してきましたが、その中には、様々な工夫を凝らし、楽しく身につく学校教育を提供している先生方が、おおぜいいらっしゃいました。

でも、それらの個々の学校の努力が、広がっていきません。個人個人の先生方が努力していますが、もう限界です。よい教育があっても、皆が忙しすぎて、新しい工夫を取り入れたり、仲間と教育について語り合ったり、情報を共有する時間がないのです。先生方は、朝8時から夜8時まで一日12時間学校にいます。昼休みも子どもたちの給食の世話をします。5時に帰宅する先生は、不熱心な先生だといわれ、クラブ活動の指導や、テストの採点、毎日の学級通信の発行で、土曜日でも日曜日でも夏休みも休みが取れません。その傾向は現在ますますひどくなり、労働科学研究所の今年の調査によれば、日本の教員の半数が、あまりの忙しさに授業準備ができず、健康状態に不安を抱え、7割の教員がストレスを抱えていると答えています。

また、よい教育を支える仕組みがありません。オランダのような教育サポートセンターはなく、自分たちで自主的に情報交換をしています。自分たちで教育のために工夫して使える資金も大変少ない状況です。

そんな中で、公立学校は、段々と質の低下が起こっているといわれ、お金のある家や教育熱心な家庭の子どもはより安全と質を求めて、私立に流れはじめています。でも、私立学校は小学校で全体の1%、中学校で6%、高校で30%です。しかも、学費はほぼ全額家庭が支払います。そして、人気のある学校に入るためには受験に通らなくてはなりませんから、受験のために、時には小学校4年生から、放課後や土日に塾に通い、暗記の勉強をします。

一方で、公立学校を市場原理で競争させようという動きが出てきています。親の学校選択の基準は学力であることが多いですから、学校は今よりさらに競争の場になりかねません。もしよい教育を広めたいと思ったならば、日本で一番効果的なのは、「このように好奇心のあふれるのびのびとし、自立して自己決定のできる子どもを育てる教育は、結局、学力が高い子どもを育てるのです」という殺し文句です。

社会的・情緒的な発達が必要な時期に、さらに、勉強と競争の世界に子どもたちが巻き込まれていきます。そして、親の資力を背景に、このようにして受験戦争に勝った「勝ち組」の子どもたちが、後に、日本の官僚、企業人として、優秀なエリートとして、日本の社会を作っていくことになるのです。格差は広がり、悪循環が起っています。

日本の教育の結果が、日本の経済発展を促し、それは一面では成功といえるでしょう。しかし、子どもたちが自殺し、親が子どもを持つことを不安に思うような社会ができたことを、私は成功と呼ぶことができません。11月28日に、イギリスのレスター大学の社会心理学者ホワイト教授が、世界幸福度地図を作成し、オランダが15位、日本が90位という結果を出しています。日本は経済的な富にも学力の高さにもかかわらず、世界の平均に達しませんでした。(EUの結果によれば、国民自身が幸せであると感じている度合いは、ヨーロッパでオランダとフィンランドが一位でした)。また、国連は「子どもの権利条約」にしたがって、5年の間隔をおいて2度も、日本の子どもたちのストレスの重さを指摘し、改善を勧告しています。日本は、これから子どもたちをどう育て、その子どもたちは世界とどのような関係を持っていくのでしょうか？経済大国といわれる日本の動向は、世界にも関係してくることであると、私は思います。

オランダの教育から日本がこれから学べること

今、日本には、教育の理念そのものの大きな転換とそれを支えるシステム、さらに、具体的な教育の方法、教材が必要です。もちろんそれは、日本文化を知った者が、自らの力で作っていかなくてはならないでしょう。でも、今、教育が閉塞状況になって、自浄作用が働かなくなっている日本国内だけで、その作業をすることには限界があるのではないか、そう私は思いました。時間をかけて、さまざまな新しい教育をとりいれてきたオランダに、私は希望の光を見出しています。

なぜオランダの教育か？それは、日本にない発想や弱い発想をオランダがしっかりと持っているからです。つまり、教育の自由、社会的・情緒的発達の重視、特別支援教育の重視、体験と省察を基にした教育、学校コミュニティ全体の協働体制、それらの基盤としての、生活の質を大切にする家族のあり方、です。日本の教育がはまってしまっている隘路から出るための対抗概念として、これらの考え方が、日本に浸透してくるといいだろうとわたしは思っています。一つ一つ見ていきたいと思います。

ただ、その前に、オランダと日本の学校を現場のレベルで見学して比較したときに、実際にどのような差があるか、という観点に立って申し上げますと、授業のやり方などに関して、オランダの方がいい、という単純な断言は難しいように思います。オランダでもいい学校はいいし、悪い学校は悪い。日本もそれは同じです。

日本の先生の科目指導に関する質は、平均してかなり高いのではないかと私は思います。少なくとも、生徒のレベルが統一された、オランダの高級住宅街やエリート校の学校よりも、飛び級

や留年がなく、レベルが一定せず、先生が苦勞している日本の学校の方が、工夫をしているように思われます。これは、問題が深刻であるほど、それへの対応が進む、ということのように思います。

先生との関係も、オランダよりも深く、仲のよい関係であることが多いですし、保護者同士のつながりも密接です。宗教による色分けがない分、地域としてのつながりがあることも、放課後、自由に一緒に遊べることも、子どもたちにとっては、大切なことです。

また、たとえば、集団での活動に関しては、日本の教育技術は非常に高いレベルで、それは授業もそうですし、特別活動、たとえば、給食、委員会、クラブ活動、集団登校、生物の飼育、文化祭、運動会、掃除、修学旅行、など、みんな一緒に取り組むという一体感や充実感、オランダの学校ではやや得にくいものかと思います。オランダと日本の両方の学校を体験している子どもたちに聞いて見ると、日本の学校は、みんなでやるから楽しい、という答えが返ってきたり、先生が熱心で、仲良くて、授業がそれなりに楽しい、という答えが返ってきたりします。

さらに、子どもの立場に立ってみると、クラスの人数が多いことも、実はいろいろな生徒に出会い、友達を選んで楽しい、と言います。授業の中で、みんなで議論したり、先生の話と先生と一緒に考えていったりする過程も楽しいと言います。

一方で、オランダの個を大切にするというあり方が進みすぎると、確かに、一人一人がそれぞれで何かをやっている、ということになりかねない場合もあります。そのあたりも、日本のただ何でも一緒にしなければならない、という学校に問題があるように、オランダの自由にさせすぎる、という学校にも問題があるとオランダ国内では言われており、その逆に日本でも、子ども一人一人を活かしながら、みんなで盛り上がる学校があり、オランダでも、同じような学校がある、ということがいえると思います。

しかしながら、違う国の違う立場、違う発想からリフレクションして学ぶ、ということそのものに私は意味を見出しています。オランダにはオランダの課題がある、それを確認しつつ、日本の学べるところを、しっかりと見ていくことができると思っています。

教育の自由な工夫：

日本の公立学校の先生たちは、自分たちは縛られていると感じています。ところが、実際のところ、何に縛られているかという、文部省や教育委員会の縛りはそれほどでもなく、学級の中で教える内容まで法で制限されているわけでもなく、校長の何かあったら責任を取らなければならないという不安や、生徒たちに平等にという名目のお互いの能力の比較、つまり、足の引っ張り合いに縛られている場合が多いと思われます。また、真面目な先生が多いので、融通を利かせて抜け道を使う、ということが難しいのかなと思う面もあります。

校長が自由な発想の学校では、公立の学校でもかなりの工夫が可能で、実際にかなり自由な教育を展開している学校が各地にあります。特に近年は、教育特区とって、自由な試みをしたり、新しい取り組みの実験校になったりすることができるようになってきました。

まずは、日本の先生たちに、オランダの具体的な教育実践の工夫の紹介を通して、教育は自分

たちが創っていくものである、ということ伝えること、実感してもらうことが必要だと思っています。

現場のすぐれた先生であれば、オランダのよい学校に数日も滞在すれば、そのエッセンスを感じ取り、日本に持ち帰ることができるでしょう。日本の先生たちは、自分たちがもっと工夫をしてもいいのだと解き放たれたとき、素晴らしい教育を展開していく力を持っていると、いくつかの日本の学校の実践から私は感じています。そして、その具体的な動きが出てきたときに、オランダの様々な学校で工夫が積み上げられてきた教育方法や多様な教材が、日本にとって参考になるでしょう。

なお、学校選択の自由や学校設立の自由については、ここにいらっしゃるリヒテルズ直子先生の本（『オランダの教育』平凡社 2004）で詳しく分析されており、既に日本はその方向に向かいつつあるように思っています。これを実現するには、私立学校の無償化が必要でしょう。

社会的・情緒的発達の重視：

オランダの学校を訪問していて、ごく普通の先生からよく聞く言葉が、社会的・情緒的発達ということばです。日本の学校ではあまり聞かない言葉です。社会性がない、とか、情緒に問題がある、というネガティブな言い方をすることはありますが、普通の子どもたちに対して、ポジティブにこの発達を促していこうという発想には欠けているように思います。日本の心理学者たちは、自分たちの理論としては、様々な発達段階について考えてきましたが、乳幼児期と思春期の課題と対応に関心が行き過ぎて、特に学童期の課題については、十分に教育と結びつけて考えてくることができなかったように思われます。

日本において、勉強中心の生活とテレビやゲームに取られる時間は、子どもたちから日常生活能力を育てる機会を奪いました。つまり、学力偏重とメディアの導入が子どもたちの問題を加速しています。しかし、その代わりに誰が何を担って、どう育てていかななくてはならないかについて、しっかりとした見通しがたちません。

生きる力が大切である、と皆がいますが、それが何であるかについて、実際に何をどの程度、どの年齢でできるべきであるか、ということが合意されていません。そのために、ゆとり教育とか、総合的な学習という概念が、教育に導入されても、教師たちは知識以外のどのような力を子どもたちにつければいいのかわからないまま、混乱に陥りました。教えるべきことの優先順位がはっきりせず、ただ、闇雲にいろいろな試みをするので、教員に余裕がなくなりました。

そして、その代わりに、今、わかりやすい目標として、早寝早起き朝ごはん、あるいは、挨拶をしよう、しつけをしよう、朝の読書をしよう、という掛け声が、日本では盛んに言われていますが、それらは、大人による子どもの生活のコントロールの意味合いが強く、子ども自身のニーズと発達の観点に立っているとはあまり思われません。

ある年齢段階で、学校や家庭で身につけるべき社会的・情緒的発達が何であるのか、オランダの例を参考にしてもっと議論していくことが、日本の教育の目標設定に役に立つと思います。

特別支援教育の重視：

一人一人の子どものサイズにあった教育がオーダーメイドで作られる必要がある、という発想が、日本には欠けています。特別な支援が必要なのは、発達障害を持った特別な子どもだけである、と考えられ、一般の子どもたちもそれぞれその子どもに合わせたケアが必要である、という発想はまだ不十分です。当然、ケア・コーディネーターやリメディアル教師はいません。むしろ、文句の言えない発達障害の子どもたちと、肩身の狭い親たちを対象とする特別支援の教員に、能力のない教師があてられることすらあります。現在、発達障害の子どもたちの数が増えつつあり、担任ではもう対応できない状況が現出していますので、必然的にこの部分は、変化していかざるを得ないでしょう。そのときに、北米型のスクールソーシャルワークやスクールカウンセラーという問題対応型の発想よりも、オランダ型の成長発達をトータルで見ていくケア・コーディネートの発想の方が、全員をフォローできるという意味において、日本には参考になるのではないかと私は考えています。

体験と省察を基にした教育：

日本の教育においても、体験は以前に比べて、不十分とはいえ重視されるようになりました。しかし、省察については、まだその方法が確立されていません。生徒についても、先生についても、です。

モンテッソーリの方法のような生徒自身による自立した学習の確立(自分で体験し自分で振り返りながら身につける)が必要ですし、イエナプランのような教える体験による学習の定着(年少者に説明する行為を通して学習を定着させる)、フレネのような共同作業を通しての鏡映効果(仲間とのやりとりと思考の言語化の作業のなかで、新しいテーマと自分自身を発見する)、シュタイナーのような身体的感覚からの点検(体験を身体的に取り入れる)、ヴィゴツキーのような理論と実践の統合(学習を体験により深化させることで、身につける)など、これらのさまざまな偉大な先人の知恵による発想が、統合されて、自然に教育の中に取り入れられている状態がオランダにはあるように思われます。そのために、それらの発想が、さまざまな生徒の個人カルテ、ポートフォリオのようなものに反映され、単に形式的な記録ではなく、活用されるものとして存在していることがわかります。

また、教員養成についても、オランダにおける体験と省察を基にした教育の実践が、日本には大変参考になると思われます。カナダの教員養成も調べたことがありますが、日本の場合は、基本的な教員養成の構造や発想がカナダやオランダとはかなり異なりますので、日本でそれらの発想や実践を取り入れていくには、大学教員の意識改革がまず必要となり、これには多くの時間と工夫が必要に思われますが、教育のベースを作っていく作業として、欠かせないものだと思います。私自身は、これから、特に、オランダや北米の教員養成の発想を参考にしながら、コンピテンシー概念をベースにした教員自身による評価・省察とそれによる成長のモデルを研究していきたいと思っています。

市民の育成：

市民教育については、北米の発想からこれを入れていこうといういくつかの流れがあり、これ

から日本でも次第に進んでいくことが期待されています。大人向けに様々なところでワークショップが開催されています。でも、子どもたちが一人一人自分の考えを持つことができるような教育は、教室内の心理的安全性が確保されていない日本では、まだかなり難しいように思われます。教員自身が、市民としての基本を身につけていないので、オランダ語の g を発音できない教師がオランダ語を教えることができないようなものなのです。私は、カナダで広がっているプログラムで、市民教育を含む共感教育のプログラム「共感の根」を日本の小学校で行いたいと思い、実際に小学校高学年の 4 クラスでパイロット的に実施してみましたが、日本の場合は、子どもたちに市民教育を行うと、よほどよいクラスでない限り、教師が子どもたちの意見を尊重していないという教室内の事実や、校長が教師を尊重していないという学校内の課題が明らかになってしまうのです。したがって、市民教育を行うのは、まず個の確立し、問題意識のはっきりした大人や青年からであるか、あるいは、もっと幼児の頃、安全感がある教室の中で導入し、それを継続してじっくり育てていかないと難しいのではないかと、思っています。それは、私の見学したフェルゼンにある小学校が、幼稚園から次第に新しい教育を導入していった、というようなオランダの新しい教育の導入の事例から学ぶことができると思います。

学校コミュニティ全体の協働体制：

これは今後、日本でも自然に、次第に、進んでいくと思いますので、あまり取り上げる必要はないかもしれません。が、抑えておきたいポイントの一つです。

オランダの学校に行くと、たくさんの方が教育に関わっています。ボランティアのおばあさん、親、教育実習生、アシスタント。日本では、これらの人たちが関わるのが、邪魔になる、面倒である、という意識の強い先生が多く、また親の側も先生を育てるというより、批判するという態度の親が多いのです。互いの批判からは、よいものは生まれませんし、子どもたちにとっても、親が教師を批判し、教師が親を批判する関係は、教育的ではありません。大人が皆で子どもたちを育てていく、互いに学ぶ、という発想で、協働作業を進めていくことができれば、もっと人材や時間の有効活用ができると思われれます。

今は、アメリカ型の PTA が、硬直化して、親に対する「強制的な」ボランティア活動となっていますので、これを変えていく必要があるでしょう。日本においても、一つ一つの学校の親や地域の大人の関わりが盛んな学校が出てきていますが、それらの活動に対して、側面支援のできる組織があれば、活動がもっと広がっていくことでしょう。具体的には、オランダのクリスチャン系の親の組織である OUDERS & COO. のような、学校と親をきっちりと結ぶことのできる団体が日本にもできるといいと思っています。

生活の質を大切に作る家族のあり方：

これは、教育の分野の話ではありませんので、ここに取り上げるかどうかは、迷うところですが、先ほど日本の子どもたちの置かれた状況でお話したように、日本社会は、ミヒヤエル・エンデのモモの時間泥棒に支配された状況におかれています。また、レイチェル・カーソンの沈黙の春、を迎えています。

先進国の中でもっとも働かない国、オランダの生活は、日本人から見ると嘘のようです。まず、これを伝えて、日本人をびっくりさせなくてはなりません。多少、事務手続きが遅くなろうと、土日に店が開いていなかろうと、担任が交代しようとして、スーパーマーケットのカウンターで10分待たされようと、人間は生きていけるのだと、そういう生活にもう一度戻ることが必要なのだと気がつかせる必要があります。

これはつまり、自分と自分の子どもを大切にすることを、ワーカホリックの日本人に伝える必要があるということです。教師になると、自分の子どもの世話をすることができないのが、日本の教育現場の実際の姿です。教師の子どもが不登校になっている事例はいくらでもあります。教師の学校の理想と現実の生活がかけ離れているのです。

また、水と戦っている国オランダは、環境に対する配慮をせざるを得ません。日本のように自然が豊かな国は、気がつかないうちに、国土が破壊されかけています。子どもを育てていくときには、自然が必要です。日本の都会ではそれがなくなってきました。

実は、教育制度云々を言うよりも、もし生活の質を大切にすあり方、子ども一人一人を大切にす時間を持てる家族、子どもの環境を考え、守っていくことのできる社会、これが実現できるのであれば、それに連動して、様々な日本の教育の問題は解決するのではないかと私は思うのです。

子どもの尊厳をどれだけ大切にできるか、それを、オランダの視点を通して、日本の教育の中に入れることができればと思っています。

おわりに

私は、7年前にカナダに一年滞在し、自分の二人の子どもを現地の保育園と小学校に入れて育てながら、カナダの子育てについて調査をし、それを日本の子育てと比較して小さな本にまとめました（『社会で子どもを育てる』平凡社新書 2002）。幸い、この本が日本の子育て支援関係者たちの目に留まり、日本の子育て支援施策に影響を与えることができました。

そして、今回は、私はオランダに来て、今度は子どもを現地の小学校と中学校に入れ、母親として、また教育心理学者としてオランダの学校に関わってきました。オランダ語ができないという限界があつて、十分に資料が読み込めませんが、その分、直接に現場を見ようと、20回以上学校を視察し、10以上の教育関連機関を訪問し、数十人の教育関係者にヒアリングをしました。これから帰国までに、さらに十数か所の訪問を予定しています。この結果を、日本に帰国したら、何らかの形でまとめて、日本の人たちに伝えたい、と思っています。オランダの教育のよい点を、日本にどのような形で伝えれば、日本にとって、またオランダにとって、よい成果となるか、さらに考えていきたいと思っています。

最初の写真に戻ります。日本の子どもたちは、学校で常に緊張を強いられています。授業で間違いの発言をすれば、友達に笑われ、先生に叱られるか、無視されます。目立ちすぎると、嫌われます。小さな頃からそういう体験を積み重ねているので、小学校中学年頃になると、よほど自信のある子ども以外、自分の意見をあまり言わなくなるのです。

この左側の子どもを、右側の子どものようにリラックスさせてあげたい。それが私の小さな願いです。

そしてもう一つ。現在、日本には、学校教育や家庭教育をもっとコントロールできるようにしよう、という動きがあります。教育を徳育と結びつけようとして、心のあり方まで教育で規制していこうと動きです。かつてある政治家は、国のために命を捨てられる国民を育てなくてはならない、と言いました。人々のための国ではなく、国のための国民を育てようという発想です。日本はアメリカのように戦争する国になるのでしょうか？それは、世界的には、あるいはオランダにとっては、どういう意味を持つのでしょうか？

住む人のための社会を作っていく教育を子どもたちに提供したい、それが私の大きな願いです。

さて、日本の教育界には、子どもの頃、学校で大変な思いをした人たちや、次世代によい教育を与えたいと考える人たちがいて、今、教育改革に動いています。

今日は極端な話ばかりしましたが、多くの日本の子どもたちは、今日の話のような場に生きているわけではないということ、あるいは、そのような場においても、しっかりと自分を創っていることを、最後に確認させていただきたいと思います。

たとえば、私の世代に既に、様々な問題は生じていましたが、今、私はそれほど、オランダの皆さんと違う人間ではないと思います。同様に日本の子どもたちも、普通はオランダの子どもたちと同じように、情緒豊かに生きています。オランダにはオランダの問題があり、日本には日本の問題がある。それを情報交換して、よいところを互いに取り入れられればと思います。

(武蔵大学人文学会雑誌第 40 巻第 1 号 2008 年 7 月より一部修正転載)